

後期聖書ヘブライ語における קָטַל 形の用法について

— 『ダニエル書』 を例 に —

池 田 晶

1. はじめに

本稿では、旧約聖書中のダニエル書の地の文における接尾活用動詞 קָטַל 形¹を分析する。本稿の目的を述べるにあたっては、まずヘブライ語史における聖書ヘブライ語について、聖書ヘブライ語の動詞体系について、そして本稿のコーパスとなったダニエル書について、概観する必要があるので、それらを簡単にまとめる。その次に何故ダニエル書の קָטַל 形に焦点を絞ったのかを述べ、具体的なテキスト分析を行う、という手順を取りたい。

1.1. ヘブライ語史における聖書ヘブライ語

聖書ヘブライ語 (Biblical Hebrew, 以下 BH) は前 11 世紀から前 2 世紀ころまで用いられ、ヘブライ語聖書 (旧約聖書) によって代表される言語を指し、時代に基づく下位区分がある。最も古い時代層のものは初期聖書ヘブライ語 (Early Biblical Hebrew) とよばれる詩文のヘブライ語である。聖書の散文部分に見られるヘブライ語は、紀元前 586 年のバビロン捕囚をおよその目安として時期的に 2 つに区分される。バビロン捕囚前のものは標準聖書ヘブライ語 (Standard Biblical Hebrew, 以下 SBH) と呼ばれて散文の規範とされた。そして、捕囚期以後のものは後期聖書ヘブライ語 (Late Biblical Hebrew, 以下 LBH) と呼ばれる。SBH と LBH には時代的に開きがあるので、当然動詞組織にも変化がみられる。ただし、LBH は SBH との違いが出てきてはいるものの、SBH は旧約聖書の「規範」とされていたので、LBH の時代でも依然として用いられていたということには注意する必要がある。なお、LBH の後のヘブライ語はミシュナ・ヘブライ語 (Mishnaic Hebrew, 以下 MH) と呼ばれる。

1.2. 聖書ヘブライ語の動詞組織、そして wayyiqṭol 形と qāṭal 形に関して

BH の動詞には、次のものがある。preterite には wayyiqṭol 形、volitive には ʔeqṭol/niqṭol、それぞれ歴史的起源は異なるが jussive と imperfect には yiqṭol 形がある²。このほかに、伝統的には完了形とされてきた qāṭal 形がある。テンスとしては過去と関わるということで wayyiqṭol 形と qāṭal 形は多くの場合、ペアで分析されてきた。preterite の wayyiqṭol 形は LBH では減少しつつあったが、それについて Bush (1996) は「wayyiqṭol 形の減少にともなって文

頭でも *koṭal* 形が使われるようになった」と指摘している。

池田潤 (2004) では、Hopper (1979) の前景・背景理論³とアマルナ語⁴を手がかりとして、物語における *koṭal* 形を分析して次の3つの提案をした。

- 1) BHの *koṭal*形は TMA (以降 Tense, Mood, Aspect) に関して無標である。
- 2) *koṭal*形の TMA は文脈 (前の文の TMA と構文、同一文中の副詞) によって決まる。
- 3) 文脈からとくに指定がない場合、*koṭal*形の動詞の意味に応じてデフォルト値 (動作動詞は過去、状態動詞は現在ないし習慣) をとる。

ただし、これは SBH の散文テキストの地の文の分析を通して得られたものなので、LBH の *koṭal* 形の分析が必要となってくる⁵。そこで本稿では LBH の散文の地の文中の *koṭal* 形を、池田潤 (2004) と同じく物語の「前景・背景」に注意を払いつつ分析する。

1.3. コーパスについて：ダニエル書1章から2章4節まで

筆者は現在、SBH の時代に書かれたとされるサムエル記と列王記の二書と、それらを基礎資料のひとつとして LBH の時代に編集された歴代誌を比較することによって *koṭal* 形の時代的变化を分析している。ただし、LBH の時代の書とされながらも、基礎資料の影響を大きく受けて LBH の特徴が出ていない可能性もある。そこで、LBH の特徴をよりよく抽出するにあたって、「文法面、ことに動詞時制の用法はかなり個性的であるが、全体として捕囚期後のヘブライ語 (LBH) の特徴をはっきりと示している」と村岡 (1997:158) が述べているダニエル書に関心を持った。それでは、なぜ1章から2章4節前半という範囲に限定したかという点、まずその部分は三人称が基調の散文であるということが挙げられる。2章4節後半以降から7章末まではアラム語、そしてそれ以降はヘブライ語に戻るが、8章からは一人称の語りになっている。池田晶 (2005) で述べた通り動詞の TMA、特に M は人称の影響を大きく受ける。本稿のたたき台となった池田潤 (2004) は三人称の散文物語の地の文が分析対象となっている。以上の理由で本コーパスを選んだ⁶。

1.4. 問題の所在

SBH から LBH、そして MH と移り変わる中で、LBH には BH から MH への過渡的性格を有すると予想されるのではないだろうか。池田潤 (2011:245) は次のように述べている。

ミシュナ・ヘブライ語では接頭活用形の過去の用法 (とくにワウ継続法 (*wayyiqtol*) (中略) は失われ、聖書ヘブライ語では文脈しだいであらゆるテンス、アスペクト、モダリティをを表しうる接尾活用形 (*koṭal*) は過去 (*preterite*) の意味に特化した。(斜体字による補足は本稿筆者による。)

LBH の時代に編集されたダニエル書を分析するに当たり、次の3点に注意したい。

- a) *wayyiqtol* 形が使えるところで *koṭal* 形が使われていたのは、*koṭal* 形が動作動詞、状態

動詞を問わずに過去テンスを担いつつあったかどうか

b) SBH と同じく *ḳṣṭal* 形は文脈によりテンスが指定されたか

c) SBH の時代に TMA について無標な *ḳṣṭal* 形の性質は BH から MH への過渡的段階では、どの動詞形態が引き継ぎつつあったか。

以上の問題意識を持って分析を行いたい。

2. ダニエル書 1 章から 2 章 4 節前半までの物語談話の分析：*ḳṣṭal* 形を中心に⁷

以下では場面に区切って分析を進めてゆくこととする。紙幅の関係で、グロスは最低限のものにとどめた。

2.1. 分析例 (1) : Dan.1:1~1:14

(1) (Dan. 1:1a) ユダの王イエホヤキムの治世の第三年

(2) (Dan. 1:1b) バビロンの王ネブカドネツアルはエルサレムに来て *ḳṣṭal* これを攻略した *wayyikṭol*。

[bo	nḅukadneʔššar meḷeḷ-ḅḅel	yrušolaim	wayyṣšar	ʕoleḅ
	来た	バビロン王ネブカドネツアル	エルサレムに	攻略した	これを
	ḳṣṭal.3.m.sg			wayyikṭol.3.m.sg	

(3) (Dan. 1:2a) 主は与えた *wayyikṭol*、彼の手にユダの王イエホヤキムと神殿の備品の一部を。

(4) (Dan. 1:2b) 彼はこれらを入れた *wayyikṭol* シンアルの地にある自分の神の神殿に。

(5) (Dan. 1:2c) 備品は自分の神の宝物倉に入れた *ḳṣṭal*。

[wʔeṭ-hakkelim	ḅḅi	beṭ ʔošar ʔeloḅayw
	備品を	彼は入れた	彼の神の宝物倉に
		ḳṣṭal.3.m.sg	

(6) (Dan. 1:3-4) 王は命じた *wayyikṭol* 近習たちの長アシュペナズに、～ (Dan. 1:4) ～連れてくるように *inf...*。

(7) (Dan. 1:5a) 彼らのために～与えた *wayyikṭol*、彼らを三年間育てるために *inf*、

(8) (Dan. 1:5b) その後に彼らが立つ *yikṭol* ように王の前に(言い付けた)。

(9) (Dan. 1:6) いた *wayyikṭol*、彼らの中に、～ダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤが。

[wayhi	ḅḅem	ḅoniyyeʔl ḅʔnanyo mišəʔel waʕʔaryo
	いた (be 動詞相当)	彼らの中	～ ダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、そしてアザリヤ
	wayyikṭol.3.m.sg		

(10) (Dan. 1:7a) 近習頭は彼らに名前をつけた *wayyikṭol*、

(11) (Dan. 1:7b) 近習頭は彼らに名前をつけた *wayyikṭol*、ダニエルをベルテシャツアルと、ハナニヤをシャデラクと、ミシャエルをメシャクと、そしてアザリヤをアベデネゴと

(12) (Dan. 1:8a) ダニエルは～決心し *wayyikṭol*、

(13) (Dan. 1:8b) 近習頭に彼は申し出た *wayyikṭol*、自分の身を穢さない *yikṭol* ように。

- (14) (Dan.1:9) 神は与えた wayyiktol、ダニエルに近習頭の前で恵みと慈しみを。
 (15) (Dan.1:10a) 近習頭はダニエルに言った wayyiktol (Dan.1:10b は会話文)、
 (16) (Dan.1:11) ダニエルは言った wayyiktol、近習頭が～任じた kotal監視人に(以降会話文)

{	wayyoʔmer	doniyyeʔl	ʔel-hamməʕsar	ʔaʕer
	彼は言った	ダニエルは	監視人に	(関係詞)
	wayyiktol.3.m.sg			

{	minno	ʕar hassəʕrisim
	任命した	近習頭が
	kotal.3.m.sg	

- (17) (Dan.1:14) 彼はこの案を聞きいれ wayyiktol、彼らを十日間試した wayyiktol。

(1) は物語の導入部分であり、その内容から、以下の物語が過去の出来事を表していることが示される。(1)の内容から影響を受け(2)の *kotal* 形の「来た」はテンスとして過去性を帯びる。Bush (1996) によると、LBH では前置詞+不定形または他の名詞によって時を示す副詞節の形に変化が起こったが、この種の節には SBH では通常 *wayhi* または *whoyah* が先行し、LBH では通常 *wayhi* または *whoyah* は欠落しているというが、その様子をはっきりと分かる。そして(2) から出来事が時間の経過に沿って次々の述べられ、冒頭の「来た」は SBH では *wayyiktol* 形で現れそうなものが *kotal* 形になっているが、これも Bush の指摘、つまり「*wayyiktol* 形の減少にともなって文頭でも *kotal* 形が使われるようになった」という指摘の通りである。以降(4)までは *wayyiktol* 形で出来事が記される。(5) の *kotal* 形 *hebi* 「彼は入れた」だが、(4) でも同様の内容のことが記されている。村岡 (1997:3) によれば(4)の *wayyiktol* 形「彼が入れた」対象は、ユダ王イエホヤキムやその一党である。(5) は「入れた」対象が「備品」であるので、それを焦点化するために「備品」を前置していると考えられる。結果的に統語的な制約で「彼は入れた」を *wayyiktol* 形にできず、*kotal* 形にしたと考えられる。もちろん、テンスとしては *wayyiktol* 形の影響で「過去」となる。

(9) からは、物語の中心がダニエルたちに移り変わるのので、新しい場面への導入部分となるので、物語の背景に相当する。冒頭の *wayhi* 「いた」は *wayyiktol* 形であるが、状態性を表す動詞であるので物語の前景にはならない。(10),(11)と「名前をつける」という *wayyiktol* 形があるが、(11)は(10)の内容を詳しく言い直したものになるので *wayyiktol* 形であっても物語の前景にはならない。以降の *wayyiktol* 形は物語の出来事を時間の順に追っていったものであり、すべて前景になる。(16) の *kotal* 形 *minno* 「任命した」は従属節にあるので、主節のテンスと一致するわけではない。*minno* は動作動詞なので、テンスはデフォルト値の過去となる。

以上、ここにある *kotal* 形はおおむね池田潤 (2004)に合致する。(5) で *wayyiktol* 形ではな

く *ḳoṭal* 形が出現していることに関しては焦点化との関わりを指摘できる。

2.2. 分析例 (2) : Dan.1:15~1:17

(18) (Dan.1:15) 十日たってみると、現れた *ḳoṭal* 彼らの顔色は、～良い(状態で)。

{	umikṣot yomím ṣʾšoro	nirʔo	marʔehem	ṭob	
	十日目の終わり	現れた	外見は	良く	～
		<i>ḳoṭal.3.m.sg</i>		adj	

(19) (Dan.1:16) そこで監視人は、彼らの(ために言い付けられていた)食事と飲み物の酒は
とりやめて *pt.active*、野菜を出した *pt.active*。

{	wayhí	hammelšar	noše	ʔeṭ-paṭboḡom wyen mištehem
	be 動詞相当	監視人は	とりやめる	食べ物と酒
	wayyikṭol.3.m.sg		<i>pt.active</i>	

{	wnoṭen	lohem	zerṣoním
	与える	彼らに	野菜を
	&+ <i>pt.active</i>		

(20) (Dan.1:17a)この若者たち四人には、神は与えた *ḳoṭal* 知識を～

{	whaylōdím hoʔelle ʔarbaṣṭom	noṭan	lohem	hʔʔlohim	maddoṣ
	これらの四人の若者たち	彼は与えた	彼らに	神は	知恵
		<i>ḳoṭal.3.m.sg</i>			～

(21) (Dan.1:17b)ダニエルは理解した *ḳoṭal* あらゆる幻や夢を。

{	wḏoniyyeʔl	hebín	bḳol-hozon wahʔlomot
	ダニエルは	彼は理解した	すべての幻や夢を
		<i>ḳoṭal.3.m.sg</i>	

(18) は物語の導入部分であり、(1) と同じく SBH では通常共起する wayhi または whoyah が本節では欠落している。内容的に過去のことを指しているので、*ḳoṭal* 形 nirʔo 「現れた」のテンスは過去となる。(19) は wayyikṭol 形 wayhí (be 動詞相当) で導入されているが、もちろん、これだけで前景にはならないが、後続する能動分詞の noše 「とりやめる」と noṭen 「与える」に注目してみたい。(18)(19) では「顔色が良い状態で『現れた』、そして、(上質な) 食べ物と酒を『取りやめた』、そして野菜を『与えた』」というように出来事の順序に従って記されている。wayyikṭol 形 wayhí と分詞の組み合わせで動作動詞的機能を担い、物語の前景となることができると言えそうである。

その後の(20) の *ḳoṭal* 形 noṭan 「与えた」は wayyikṭol 形で記述出来そうだが、lohem 「彼らに」の「彼ら」を詳しく述べた whaylōdím hoʔelle ʔarbaṣṭom 「これらの四人の若者たち」

が前置されているために統語的な制約で wayyiqṭol 形は出現できず *ḳoṭal* 形となっている。続く(21)も「神が知恵を与え、そしてダニエルは幻や夢を理解した」というように時間の経過に従って出来事が記されているが、(20)の「四人の若者たち」の中でも特にダニエルに焦点を当てているためか、「ダニエル」が前置されて wayyiqṭol 形は出現できず *ḳoṭal* 形 *ḥebîn* 「理解した」となっている。(20), (21)ともにテンスは文脈により決定されている。

ここでは、wayyiqṭol 形より *ḳoṭal* 形の方が多くの前景をになっている。テンスについては池田潤(2004)の枠組みで説明できるものばかりであるが、*ḳoṭal* 形が多く出現していることに関しては焦点化との関わりを指摘できる。また、wayyiqṭol 形 wayhî と分詞の組み合わせで動作動詞的機能を担う可能性があることも指摘しておきたい。

2.3. 分析例(3) : Dan.1:18~1:21

(22) (Dan.1:18a) 彼らを連れて来るように王が言っていた *kotal* (従属節中) 時が来ると、

{	ulmiḳṣoṭ hayyomím	ʔašer-	ʔomar	hammelek	lahʔbîʔom
	それらの日々の終わりに	(関係詞)	言った	王が	来るように
			ḳoṭal.3.m.sg		prep+inf.ct.

(23) (Dan.1:18b) 近習頭は彼らを立たせた wayyiqṭol ネブカドネツアルの前に。

(24) (Dan.1:19a) 王は彼らと言葉を交わした wayyiqṭol が、見つからなかった *否定辞+kotal* (ダニエルたちのように聡明な者は)～、

{	waydabber	ʔittom	hammelek	wlo	nimšo	
	語った	彼らに	王は	～ない	見つかる	～
	wayyiqṭol.3.m.sg			&+neg.	ḳoṭal.3.m.sg	

(25) (Dan.1:19b) 彼らは立った wayyiqṭol 王の前に。

(26) (Dan.1:20a) 王が彼らに求めた *kotal* (従属節中) 知恵と判断すべてのことにおいて、

{	wḳol dḥar hoḳmaṭ bino	ʔašer-	bīḳkeš	mehem	hammelek
	知恵と判断の全てについて	(関係詞)	求めた	彼らに	王が
			ḳoṭal.3.m.sg		

(27) (Dan.1:20b) はっきりした wayyiqṭol (四人はがすぐれていることが)

(28) (Dan.1:21) ダニエルはクロス王の元年までいた wayyiqṭol。

{	wayhî	dḥniyyeʔl	šad-šnaṭ ʔaḥaṭ	lḳoreš hammelek
	be 動詞相当	ダニエルは	最初の年まで	クロス王の
	wayyiqṭol.3.m.sg			

(22)の冒頭でも wayhî または whoyah が欠落している。*ḳoṭal* 形 ʔomar 「言った」は従属節中にあるので、主節の時制とは異なる。したがってデフォルト値をとるが、「言う」は動作動詞なのでテンスは過去となる。以降 wayyiqṭol 形で語りが進行する。(24)の nimšo

「見つかる」は否定辞に後続するので統語上の制約で *ḳoṭal* 形である。テンスは直前の *wayyikṭol* 形の影響で過去になる。(26) の *ḳoṭal* 形 *bikḳeš* 「求めた」は(22)と同じく従属節中にあるのでデフォルト値をとる。「求める」は動作動詞なのでテンスは過去となる。以上の例は、すべて池田潤 (2004) の枠組みで説明できる。

2.4. 分析例 (4) : Dan.2:1~2:4 前半

(29) (Dan.2:1a) ネブカドネツアルの治世の第二年、

(30) (Dan.2:1b) ネブカドネツアルは夢を見た *ḳoṭal*、胸騒ぎを覚え *wayyikṭol*、

{	ḥoḷam	nbūḳadneššar	ḥ^alomot	wattiṭpošem	ruḥo
	彼は夢を見た	ネブカドネザルは	夢を	かき乱され	彼の心は
	ḳoṭal.3.m.sg			wayyikṭol.3.f.sg	

(31) (Dan.2:1c) 寝つけなかった *ḳoṭal*⁸

{	ušnoṭo	nihyṭo	šoloyw
	彼の眠りは	あった (be 動詞相当)	彼の上に
		ḳoṭal.3.f.sg	

(32) (Dan.2:2a) 王は言った *wayyikṭol*、～を招集するように。

(33) (Dan.2:2b) 彼らは来て *wayyikṭol*、立った *wayyikṭol*、王の前に。

(34) (Dan.2:3a) 王は彼らに言った *wayyikṭol* (Dan.2:3b は会話文)、

(35) (Dan.2:4a) カルデア人たちは王に言った *wayyikṭol*。—アラム語—⁹

(29) の冒頭でも *wayhi* または *whoyah* が欠落しているが、内容的に過去のことを語っていることが分かる。(30) の *ḳoṭal* 形 *ḥoḷam* 「夢を見た」は、(29) の文脈を受けテンスは過去になるが語順的にも *wayyikṭol* 形が使われていてもおかしくないと思われる。(31) の *ḳoṭal* 形 *nihyṭo* 「あった」の原形は、英語の *be* 動詞に相当する *ḥoyah* だが、眠りが「離れた状態にあった」というように状態動詞とも取れるし、または New King James Version のように「眠りが離れていった」というように動作動詞としても取れる¹⁰。テンスとしては文脈から過去となる。この *ḳoṭal* 形 *nihyṭo* は *wayyikṭol* 形で記されていてもおかしくはないと思われるが、編集者が *ušnoṭo* 「彼の眠り」を焦点化する意図があれば *ḳoṭal* 形という選択になるだろう。(32) 以降はすべて *wayyikṭol* 形で出来事が語られてゆく。以上、本節で出現したはすべて池田 (2004) で説明がつく。

3. まとめと今後の課題

以上で見てきた *ḳoṭal* 形をリスト化すると以下のようなになる。*wayyikṭol* 形と交換可能か否かについて△印がついているものは、焦点化が起こっていなければ交換可能であることを示す。人称はすべて三人称であった。

	TMA	動詞の種類	wayyiqṭol形と交換	語順	備考
(2)	過去	動作	○	V S	
(5)	過去	動作	△	O V	O が焦点化
(16)	過去	動作	×	V S	従属節
(18)	過去	動作	○	V S	
(20)	過去	動作	△	O V	O が焦点化
(21)	過去	動作	△	S V	S が焦点化
(22)	過去	動作	×	V S	従属節
(24)	過去	動作	×	V O	否定辞に後続
(26)	過去	動作	×	V O S	従属節
(30)	過去	動作	○	V S	
(31)	過去	動作／状態 ¹¹	△	S V	S が焦点化

以上の結果はすべて、池田潤 (2004)で説明のつくものであった。各分析例の冒頭は物語の導入部分で時代設定がなされていたが、確認した通り LBH の特徴、つまり wayhi または whoyah が欠落していた。それをだけをもって wayyiqṭol 形の使用率が下がったということは出来ないが、(2), (18), (30) のように wayyiqṭol 形が使えるところで使われていないことは注目に値する。ただし、LBH であっても、その他の部分は wayyiqṭol 形が多く使われていることが確認できた。それでは「1.4. 問題の所在」であげた3点についてまとめてみよう。

「a) wayyiqṭol 形が使えるところで ḳoṭal 形が使われていたのは、ḳoṭal 形が動作動詞、状態動詞を問わずに過去テンスを担いつつあったかどうか」については解釈の分かれる(31) 以外はすべて動作動詞だったので未解決である。

「b) SBH と同じく ḳoṭal 形は文脈によりテンスが指定されたか」については、動作動詞のデフォルト値によるものか、それとも時代変化により ḳoṭal 形そのものが過去テンスを持っていたのか、それとも文脈から指定されたのか、その区別がつきにくいので、今後より多くの例で検討してみたいと思う。

「c) SBH の時代に TMA について無標な ḳoṭal 形の性質は BH から MH への過渡的段階では、どの動詞形態が引き継ぎつつあったか」については断言できるほどの論拠は挙げづらいが、あえて言えば(19) で見られた能動分詞の例がある。これも、その他の例を今後見る必要があるが、直前の wayyiqṭol 形のテンスの影響を受けているように見える。

現段階では、SBH, LBH を問わず、散文の地の文については池田潤 (2004) の見解が有効で、やはり規範としての SBH は LBH でも大きな影響を持っていたと言えそうである。ただし、一見規範としての SBH の影響が続いていたと見るとしても、以下の点に注意しておかなければならない。wayyiqṭol 形の場合は、主語が義務的な場合は統語的制約で、VS の語順にならざるを得ないが、ḳoṭal 形の場合は SV でも VS でも両方可能である。ただし、ḳoṭal 形の場合は焦点との関わりもあるので、どちらか一方が標準で、もう片方が特殊

であるということは難しいと思われる。逆に、焦点化との関わりを指摘したものの、実は焦点化とは関わりがなく、語順そのものが変わりつつあった可能性も視野に入れるべきかもしれない。今後は、今回の結果を踏まえて LBH の散文の *koṭal* 形についてより多くの例に当たって上の三つの課題を解決することに加えて、能動分詞の用法、会話文の *koṭal* 形に、そして語順について分析をしたいと思う。

註

- ¹ 聖書ヘブライ語のローマ字転写は、池田・高橋・池田 (2003) の提案する方式に従うが、メテグは省略するし、マケフは「-」で示した。
- ² 詳しくは池田潤 (2004.: 74.FN. 24) を参照のこと。
- ³ 前景・背景理論では、物語における主筋的である事象と、副次的事象が区別されている。物語の主要な出来事 (MAIN-LINE EVENT) は物語の言わば「前景 (FOREGROUND)」であって、それを物語る時制は過去形で表現され、それ以外の小さな出来事は非過去形で表現される傾向があるという。それに対し、副次的事象「背景 (BACKGROUND)」は、主筋の事象と時間的に一定の順序に従っているわけではなく、むしろそれは主筋の事象を説明したり、敷衍したりする目的に使われ、主筋の事象と同時的であるため、その動詞は継続的、状态的、反復的であり、未完了的であるという。BH の研究においては *wayyiqṭol* 形 = 前景、*koṭal* 形 = 背景というように動詞の形態と時制選択を 1 対 1 に対応させていた。遠藤 (2003) は、前景・背景理論の有効性を認めながらも、前景・背景の区別が分極化している点で問題であると指摘した。池田潤 (2004) は最新の比較セム語学の成果を取り入れ、動詞の形態だけでなく、例えば動詞の意味にも注意を向けるなどして、多くの基準を採用して、総合的に前景・背景を判断するという方法が提示され、*wayyiqṭol* 形以外も前景となりえることが示された。筆者は物語の前景をみるにあたり、重要だと考えられる要素は「出来事 (EVENT) の時間に沿った連鎖性」なのではないかという考えを持っている。紙幅の関係でこれ以上詳しく紹介することは出来ないが、本稿では、EVENT を動詞の形態だけからではなく「時間の中での連鎖性」という枠組みの中で捉えたいと思う。
- ⁴ アッカド語から自立語の多くを借用するが、これにカナン語の接辞をつけ、カナン語の語順に配列する混成言語である。詳しくは、池田潤 (1992) を参照のこと。
- ⁵ また、この分析は地の文のみが分析対象で会話文は分析されていない。会話文の *koṭal* 形を分析したものは池田晶 (2005) を参照。結果的には、会話文の *koṭal* 形は地の文とは異なっているので池田潤 (2004) に若干の修正を加えるものとなった。
- ⁶ もちろん、ダニエル書が何らかの資料を用いている、ということ否定しているわけではない。むしろ、旧約聖書の他の文書と同じく何らかの資料を用いていると考える方が自然かもしれない。
- ⁷ 以下の引用では、できるだけヘブライ語原文に近い語順での参考訳、その下にグロスを付した。グロス 1 段目に原文のローマ字転写、2 段目に意味、3 段目に語形分析である。略号は次のとおり。1 = 1 人称、2 = 2 人称、3 = 3 人称、m = 男性、f = 女性、sg. = 単数、pl. = 複数、jus = jussive、inf = 不定形、pt. = 分詞 (必要に応じて active/passive : 能動/受動)、prep. = 前置詞、& = 接続詞ワウ、参考までに *koṭal* 形とその他注目したい語形は太字で示す。必要に応じて形態素境界は+で示す。
- ⁸ 字句通りには「彼の眠りは、彼の上に (離れて)」。参考までに New King James Version では “his sleep left him”, King James Version では “his sleep brake from him.” となっている。

⁹ 以降、テキストは7章末までヘブライ語からアラム語に切り替わる。

¹⁰ be 相当の動詞の解釈については、前景・背景との関わりを論じた遠藤 (2003: 87) の記述が参考になる。に「情報の近景・遠景の程度というものは、動詞形態の違いといった統語論上の問題というよりも、もっと意味論の領域の問題として、具体的には wayhi 動詞 (be 動詞に相当) や状態動詞の場合と同様に動詞自体の持つ語彙の意味や、句全体として持つ意味内容によって規定されるように思われる」

¹¹ 脚注 10 を参照。

【参考文献】

Badillos, A. S. (1993) *A History of the Hebrew Language*, Cambridge.

Bush, F. (1996) *Ruth, Esther*. Word Biblical Commentary 9. Dallas, Texas: Word Books, Publisher.

遠藤嘉信 (2003) 「聖書ヘブル語説話文研究における『近景・遠景化仮説』の問題」
Exegetica, 14: 77-90.

Hopper, P. J. (1979) Aspect and foregrounding in discourse. In: T. Givón (ed.) *Discourse and syntax*, 213-41. New York: Academic Press.

池田晶 (2002) 「ルツ記研究：その成立時期をめぐる言語学的研究」広島大学大学院社会科学研究所修士論文。

----- (2003) 「旧約聖書ルツ記の成立時期と文学的潤色について」『一般言語学論叢』4/5: 59-80.

----- (2013) 「聖書ヘブライ語の物語における前景・背景、そして語り手に関する一考察」『ニダバ (Nidaba)』西日本言語学会, Vol.42: 011-20

----- (2005) 「聖書ヘブライ語の物語の会話文における *ḵoṭal* 形の用法について」『言語学論叢』24. 筑波大学一般・応用言語学研究室。

----- (2006) 「聖書ヘブライ語の物語における *hinne* の用法—創世記に基づく談話分析—」筑波大学博士課程人文社会科学研究所文芸・言語専攻中間評価論文。

池田潤 (1992) 「アマルナ語：紀元前 2 千年期のピジン」『オリエント』35: 1-21.

----- (2004) 「アマルナ語から見た聖書ヘブライ語の接尾活用形」『言語研究』126: 69-92.

----- ・高橋洋成・池田晶 (2003) 「聖書ヘブライ語のラテン文字転写について：文字学・文字論的考察と筑波方式の提案」『一般言語学論叢』6: 61-106.

----- (2011) 『ヘブライ語文法ハンドブック』白水社。

Jun IKEDA. (2003) The Biblical Hebrew suffix conjugation in the light of Canaano-Akkadian.

Annual of the Japanese Biblical Institute 29: 31-45. Tokyo: The Japanese Biblical Institute.

Joüon, P. and T. Muraoka (2008) *A Grammar of Biblical Hebrew*. 2nd ed. Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblio.

Kutscher, E. Y. (1982) *A history of the Hebrew language*. Jerusalem: Magness Press.

村岡崇光 (訳) (1997) 『旧約聖書 XIV ダニエル書 エズラ記 ネヘミヤ記』岩波書店。

ヴァインリヒ, H. (1982) 『時制論』協阪豊他訳, 紀伊国屋書店。